

---

# 遊戯王交響詩篇 - DUEL ALIVE -

六堂 修羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王交響詩篇 - DUEL ALIVE -

### 【Nコード】

N7685U

### 【作者名】

六堂 修羅

### 【あらすじ】

とある中学の生徒、葉月陽子は決闘部に所属する花もはじらう13歳。

そんな彼女の日常と決闘の物語。

これまた別のサイトで書いていた小説です。

女の子達が日常の中で和気藹々と決闘をするような内容にしようと思っってます。

ぜーんぜんプロット立ててなくて思いつきだけで書いてるので、

どうなるかわかりませんが。(笑)

ちなみに、サバイバーのキャラ達の一部も出てきます。

(主人公誰かさんと親子ですしね)

デッキもほとんどがガチデッキばかりだったサバイバーに比べ、大半がファンデッキにしようと思ってます。

キーワードがどうなるかはこれからの展開次第です。

もしかすると、サバイバー同様シリアス路線に走るかもしれないんですけど。

さすがにR15とかR18はないと思いますが。

(でも、ガールズラブはあるかもしれないですよねえ…)

なお、決闘は各話に一回なので、サバイバーよりも更に少ないです。

(遊戯王小説としてはどうなんだ、と思いますが)

どちらかと言うと、学園コメディ的な描写が多いのでご了承ください。

## デッキ集(1) 陽子デッキ(前書き)

本編の主人公、陽子のデッキです。

ジエネクス帝の変形で、相手を帝で消耗させながらダークガイアでトドメを刺す、というデッキです。

ダークガイアを使う割に岩石族が少ないですが、そこは3ゴレで補う形になります。

黄泉や数少ない岩石を除外されるのが事他辛いのが難点となります。

3ゴレやグランマが奈落に落ちそうになったら、エネコンを切っても墓地に落としましょう。

(まあケースバイケースですが)

まだ試作段階であるため、今後も試行錯誤を重ねて改良していくと思います。

デッキ集(1) 陽子デッキ

【モンスター×24】

(上級×9)

トラゴエディア×2

冥府の使者ゴーズ×1

邪帝ガイウス×3

地帝グランマーグ×3

(下級×15)

スノーマンイーター×2

マジックストライカー×1

クリッター×1

ジエネクスコントローラー×3

ジエネクスウンディーネ×3

黄泉ガエル×2

バトルフェーダー×2

グローアップバルブ×1

【魔法×14】

死者蘇生×1

精神操作×1

大嵐×1

ブラックホール×1

月の書×1

ワンフォーワン×1

愚かな埋葬×1

ダークコーリング×2

サイクロン×2

エネミーコントローラー×3

【罾×2】

水霊術 葵×1

転生の予言×1

【エキストラデッキ×15】

(融合モンスター×2)

E HERO ダークガイア×2

(シンクロモンスター×10)

レアルジェネクスクロキシアン×1

スクラップドラゴン×1

ブラックローズドラゴン×1

レアルジェネクスドライブスフォース×1

氷結界の龍ブリューナク×1

レアルジェネクスドライブアームズ×1

A O Jカタストル×1

マジカルアンドロイド×1

アームズエイド×1

フォーミュラシンクロン×1

(エクシーズモンスター×2)

No.30 破滅のアッシュドゴーレム×2

## デッキ集(1) 陽子デッキ(後書き)

### 【キャラ紹介：葉月陽子】

本編の主人公です。ただ、本人割と地味であり、主にシャーロット・ホームズにおけるワトソンような役どころを受け持つことになります。

サバイバーに登場する葉月耕四郎の娘であり、非日常につま先くらは踏み込んでいる結構危うい立場にある娘です。

また、母親をテロで亡くしていたり、その後の一年間の記憶がなかったりとかかなり悲惨な人生を歩んでいますj。

アライブがシリアス路線に走るとしたら、間違いなくこれ絡みになるでしょう。

友達実は少なく(知り合いは多いのですが、陽子本人が友達になるのをできる限り避けています)、ほぼいつも要と一緒にいます。

これは『大切な人が人がいなくなると悲しいから大切な人を複数作らない』という潜在意識によるものです。

そんなかわいそうな彼女ですが、筆者としては晶よりは余程好きなんですよねえ。シリアスもギャグもこなせる万能キャラなんで。

フェイバリットカードがダークガイアであるなど、決闘においては非常にバイオレンスなスタイルに見えますが、実際には敵の攻撃を凌ぎつつ機を見て一撃必殺というスタイルになります。

デッキに関しては今後も改良を加えていく予定です。近々ヴェルズ軸に走ってみようかと思ってます。

## 第1話 これが私の生きる世界(1)

時計の針の音が、やけに大きく聞こえる。

学校指定のセーラー服に身を包んだ少女、ハツキヨウコ葉月陽子は時計を見つめる。

決戦の時まで後3分。

インスタントラーメンがちょうど作れる時間が、今の陽子には3倍以上に感じられた。

頭の中で綿密にシミュレートする。ルートを頭に思い描き、ハプニングにあつた時の対処法を考える。

後2分。

こうしている間にも、ノートを書く手は止めない。

ホワイトボードは文字で埋め尽くされているが、陽子は要領よく整理してノートを取っていく。

このノートも後に必要になってくるのだ。

後1分。

頭の中でイメージトレーニングをし、身体を温めたつもりになつておく。

勝負は数分で終わる。

故に1秒でも早く走ることが求められる。

そして、0分。

きんごんかごんごん

午前中の授業が終わる合図のチャイムが校舎中になり響き、先生が授業を終える旨を伝え、級長が起立、礼の号令をかける。それが終わった瞬間、陽子の勝負が始まった。

椅子を蹴飛ばし、陽子は飛ぶように駆けていく。

誰にもぶつからないように気をつけながら教室を飛び出し、風のように廊下を駆けて行く。

廊下を走らないように、という張り紙はとりあえず見えないことにした。

やがて階段に差し掛かる。

恐らく同業者と思しき、階段を駆け下りる者たちの姿が見える。

このままでは先を越される。

陽子も負けじと階段を3段飛ばしの勢いで下り、中段に差し掛かったあたりで手摺を乗り越え飛び降りるなどあらゆる手を使ってライバルたちを追い抜いていく。

先生に見つかったら絶対に呼び止められて怒られるだろうが、気にしない。

その甲斐あって、陽子は瞬く間に目的地にたどり着いた。

そこは購買と書かれた札のかかる部屋。

陽子は迷わず、そこに飛び込む。

だが、すでに時遅し。

売店の中はすでに人で溢れ返り、レジの前にはまるで獲物にたかるハイエナのような人の群れが蠢いていた。

(負けない！)

陽子は意を決し、人の森に飛び込む。

そして、揉みくちやにされながらもなんとかそれを掻き分け、レジの前にまでたどり着く。

辛くもたどり着いた陽子を売店のおばちゃんは、まるで釈迦如来のような慈愛に満ちた笑顔で迎えてくれた。

「おばちゃん、いつもの！」

「あいよー！」

陽子の声に阿吽の呼吸でおばちゃんは応え、陽子の頭より大きな紙袋を渡してくれる。

「ありがとう！」

そして、陽子はすでにポケットに用意されていた1260円を、予定調和のようにおばちゃんに手渡した。

学校生活が始まってはや1年。

陽子と売店のおばちゃんはすでに戦友であった。

陽子のお昼の5分間戦争において、何よりも頼りになる無二の戦友だ。

ミッションコンプリート。

陽子再び人ごみを掻き分け、修羅場と化した売店から脱出する。

そして、意気揚々とゆっくり歩いて教室に戻る。

そして、教室に入って、頭上に紙袋を掲げて一言。

「とつたぞー！」

その途端、教室の中から喝采が起こる。

それは、戦いに勝ち抜いき凱旋した、勇敢な女戦士を祝福する声だった。

「やったぜ！さすが葉月だ！！」

「さっすが！頼りになるなあ！！」

そして、陽子は頼まれていた昼食のパンを生徒たちに手渡して、お金を回収していく。

それが、2年B組が誇る何でも屋、葉月陽子の、昼の日常の光景だった。

## 第1話 これが私の生きる世界(2)

「ほんと、あんたって暇人ね」

パンを配り終え、自分の分のメロンパンを頬張る陽子に、向かい合わせに座る少女が呆れた声で言う。

彼女の名前は永石要<sup>ナガイシカナメ</sup>。

陽子の幼稚園以来の付き合いの、幼馴染の親友である。

背中まである先生に怒られない程度に茶色に染めた髪の毛のとても整った顔立ちとプロポーションを持つこの少女は、モデルとしての顔も持ち合わせている。

更に成績も学年トップで、バスケット部のエースでもある彼女は、まさに学年のマドンナであった。

「そんなに楽しい？何でも屋って」

「うん、結構楽しいよ」

要に対し、陽子はいこつと笑顔で言う。

陽子はクラスで何でも屋をやっている。

その用務はノートの貸し出し、昼食の調達、ペンや消しゴム等の貸し出し、先生との交渉、部活の助っ人等々である。

ちなみに、料金は基本的に無料である。(昼食の調達など金銭の絡むものだけは実費をいただくが)

なお、この何でも屋業務は別に陽子が言い出して始めたわけではない。

フットワークの軽い彼女が、ついつい色々な人の手伝いをしていく内にそうしたポジションに収まってしまったのだ。

最初はクラスの1部だけが利用していたが、陽子の人懐っこい性格とハイスペックが人気を呼び、今は他のクラスからも依頼が来ることがあるほどになっている。

「あんたもさ、んなことやってないで、彼氏の一人でも作って青春を謳歌してみたら？」

要は何気なくそう言っつて、陽子の顔を見る。

肩までの黒髪と、やや童顔で、でも可愛らしい顔立ち。

陽子は飛び抜けた美人ではないが、誰からも愛される容姿をしていると思う。

実際、男子からの人気は密かに高く、彼女に声をかけたいから何でも屋業務を頼む者が少なくない事を要は知っていた。

「んー…お父さんが泣いちゃうから」

陽子は苦笑しながらそう答える。

陽子の父は娘に対する愛着が非常に深い。

中学は仕方ないが、高校は絶対にお堅い女子高生じゃないとダメ、と泣いて言われた事があるほどだ。

「私の彼氏はしばらくはこの子でいいかな」

そう言っつて、陽子は鞆の中から、黒いプラスチックのケースを取り出し、その中から1枚のカードを取り出す。

そこには青白い岩石の鎧を身に纏う巨人の姿が描かれている。

名前の欄にはE HERO ダークガイアと書かれていた。

「あのDMってカードゲームのカード？」

要は少し呆れたような口調で言う。

DMは巷では有名なカードゲームであるらしく、一時期はニュースの話題にもなっていた。

だが、正直要は陽子がこのゲームにハマっていることを面白く思っていない。

DMはオタクのやるものだ、とまでは思っていないが、少なくとも自分達の年代の女の子がやる真つ当な遊戯ではないと思っているからだ。

「でも、好きなんだ、DM」

お父さんとも遊べるし、と陽子は笑顔で言う。

何だかんだで父親べつたりな彼女らしい言葉に、要はまた一つ盛大なため息をついた。

## 第1話 これが私の生きる世界(3)

ガラガラガラ、と教室の扉が開く。

そして、一人の少女がクラス中の視線を集めながら入って来た。

セミロングの天然の金髪に、中学生離れした身長とプロポーションの絶世の美少女だ。

そんな彼女は勝手知ったる他所の教室に堂々と乗り込んで来て、一直線に陽子達の座る席へと歩み寄って来る。

彼女を見た陽子は少し嬉しそうに笑って手を振り、要はまるで毛虫でも見るような厭そうな顔を向ける。

そして、彼女はほどなく陽子達の傍らに近づき一言挨拶を述べる。

「よう、陽子に要よ。今日も元気そうで、妾は嬉しいぞ?」

そう言って笑う彼女は水無月カレン。

陽子の所属するゲリラ部、決闘戦略研究部の部長である。

カレンは横の席から勝手に椅子を掻っ払い、陽子の右側に座る。

そんなカレンに対し陽子は、

「こんにちは、部長」

と笑顔で挨拶し、要は、

「また何か面倒事ですか」

うんざりした様子でそう言って迎えた。

「なあに、面倒事と言うほどではない」

そう言つて、カレンは一通の手紙をポケットから取り出し、机の上に放り投げる。

手紙には黒いマジックで果たし状と書いてあった。

「果たし状…ですか？」

不思議な物を見るような視線を手紙に向ける陽子に、カレンはうむ、と仰々しく頷く。

「野球部の西野とか言つ生意気な小僧がおるだろう？あやつが身の程知らずにも我が決闘部に、果たし合いを申し込んできおつたのだ」

「ああ…大地ですね」

要は同い年の従姉弟、西野大地の顔を思い浮かべる。

確かこの前会つた時、『ゲリラ部が一丁前に部室を持ってるなんておかしい！』とか言っていたのを思い出す。

恐らく、果たし合いに勝つたら部室を超越せ、とでも言つのだらう。

思慮が浅く、乱暴な奴らしい、と要は思う。

第一、あのプレハブの部室はカレンが材料を持って来て建てたものである。

更に理由は不明だが、学校からの許可もでていない。そんな訳で決闘部が部室を持っているのは、不当でも何でもないのだ。

確かあの時そう説明したのだが…

「それで、部長。何で勝負するんですか？」

メロンパンをもそもそと食べる手を止め、カレンに尋ねる。

「うむ。勝負となれば、奴らの得意分野で叩き伏せてやらねばなるまい」

「ってことは、まさか!？」

にこやかに笑って言うカレンに、いくらなんでもそれはないだろう、と言う口調で要が言う。

「うむ。野球で勝負することにしたのだ」

自信満々に言い放つカレンに、要はあちゃー、と言わんばかりの様子で、要は顔に右手を当てて天を仰ぐ。

一方、陽子はまだへー、と呑気に言いながら、もぐもぐとメロンパンを頬張っている。

「あの、カレン先輩。少しいいですか？」

事の重大さをイマイチ理解してない陽子に代わり、要がカレン

に詰め寄る。

「野球って、9人でやるものですよ？決闘部って3人しかないんじゃないんですか？」

「ああ。雪乃は役に立たん。あいつは運動オンチだからな」

そんな要に、カレンは事もなげに言う。

要は確かに儂げな深窓のお嬢様然とした、決闘部のもう一人の部員である白川雪乃を思い出す。

確かにアレは役に立たないだろう。ということは、決闘部の人数は実質2人だ。

「二人で野球をやれる訳がないでしょう！！」

「なあに、問題ない」

机をバン、と叩いて立ち上がりながら言う要に、カレンは落ちて着いた声で言う。

「妾が全打席ホームランを打って、全員三振で仕留めれば問題ない」

自信に満ちた笑顔で無茶苦茶な事を言うカレンに、要は開いた口が塞がらない。

そんな無謀な勝負、聞いたこともない。

「…ちよつと、陽子。あんたも何とか言いなさいよ」

いくらなんでも無茶だから止めろ、要は言外にそう言って、陽

子に発言を促す。

「あ、うん」

そして、陽子は花のような笑顔でこう言った。

「頑張りましょうね、部長！」

駄目だ、こいつは。

要は心の中でそう思い、力尽きたように机の上に両手をついて俯いた。

「と、言う訳で、放課後1700に体育服装で集合！いいな？」

「はい！」

力尽きた要を無視して、カレンはそう言って、陽子の返事を満足そうに頷いて受け取った後、席を立って教室から出て行った。

そして、陽子はパンを机の上に置いて、カレンが戻して行かなかった、隣の斎藤君の席を元に戻す。

その後、再び席に着きパン手に取って食事を再開した。

「…こうなったら、あたしも着いて行くわ」

「え！？要ちゃんも参加してくれるの!？」

疲れたように言う要に、陽子は喜色満面の笑顔で言う。

要はスポーツ万能で、体育のソフトボールでも大活躍をしている。

更に何より要と一緒に何かをできるのが、陽子には純粹に嬉しかった。

「違うわよ。大地の見張りをやるの」

そんな陽子に、諭すように要は言う。

自分が戦力になっても焼け石に水でしかない。

要がやるのは、大地が敬遠で逃げようとしたらそれを止める事だ。

ちゃんと打てる球なら、カレンはきっちり打ってくれるだろう。今はそれを信じるしかない。

「大地の奴…敬遠なんかしたら、金属バットで顔面をホームランしてやるわ」

「…無茶苦茶言ってるね、要ちゃん」

拳を握り締めて言う要に、陽子が自分達の事を棚に上げて冷静なツッコミを入れる。

「…あんたらに言われたくはないわ」

人の気も知らずに言う幼なじみに、要は盛大なため息をついてそう言った。

## 第1話 これが私の生きる世界(4)

時間は1700。

まだまだ明るい夕方のグラウンド。

3人の少女と大勢の少年達が対峙していた。

決闘部対野球部の決戦の火蓋が、ついに切って落とされたのだ。

「よく逃げずに来たな、小僧！」

白いTシャツに、赤いブルマと言う姿でグラウンドに雄々しく立つカレン。

(なお、学校指定の体育服装はブルマではない)

そして、手に持つ赤い木製のバットの先端を、イガクリ頭の気の強そうな、いかにも体育会系な容姿の少年、西野大地ニシノダイチに向けて言う。

「だが、勇気と無謀は全くの別物だ！妾が、貴様らがどれほど愚かで、どれほど身の程知らずか教えてやろう！」

「なにい！！！」

大地を始めとする野球部員達が色めき立つ。

「それはこっちのセリフだ！こんな無茶苦茶な条件の勝負をしようなんて、お前バカだろう！？」

「フッ。お前など妾と陽子だけでも過分であろう」

食いついて来る大地に、カレンは不敵な笑みを浮かべて言う。

「第一、こんな無茶苦茶な条件の勝負を受けたお前らもお前らだろうが。このか弱い乙女2人を相手に、野郎が9人がかりで襲って来るとは…貴様らには恥と言う物がないのか？」

提案した本人が言うなよ。

野球部員達は全員で心の中で同じように呻いた。

「まあまあ、部長。スポーツは清々しくやりましょう。ね？」

カレンの後ろからを彼女を宥める言葉を言いながら、陽子が現れる。

こちらは白いTシャツに黒い短パンと言う姿だ。

その姿を見た大地は、僅かに顔を紅潮させ、言葉に詰まる。

そして、それを悟られないように、少し顔を逸らして言う。

「は、葉月までこんな勝負に付き合う必要ないんだぞ？」

「でも、部室なくなると困るから」

困ったように笑いながら言う陽子に、大地は少し胸を痛めた。

実は大地は、陽子をカレンの魔の手から救い出すというつもりでこの果たし合いを吹っかけたつもりであった。

要の話によると、陽子はカレンに「おお、似たような苗字だな。とりあえず、決闘部に入れ」と果てしなく強引な理由で入れられたと聞いていた。

そして部長の無茶によく付き合わされると聞いていたので、内心陽子は嫌がっていると思っていたのだ。

だから、決闘部なんて何とか潰して、陽子には野球部のマネージャーでもやって欲しかった。

小器用でフットワークの軽い彼女なら、マネージャーには最適だろう。

だが、彼女は決闘部に愛着があるようだし、カレンとも上手くやっているようだ。

(許せ…葉月。これもお前の為なんだ…)

それでもなお、大地は陽子にマネージャーをやってもらった夢は棄てられない。

大地は深呼吸を5回ほどした後、例え陽子が相手でも全力でやる、と心に決めた。

「…本気でやるけど、恨むなよ、葉月」

「うん。お互い全力を出さないと、失礼だしね」

ニコニコと笑いながら言う陽子に、今度は野球部全員が心を痛める。

正直、野球部内では美人だがとっつきにくい要やカレンよりは、それなりに可愛くて人懐っこい陽子の方が人気がある。

陽子の身体能力の高さはみんな良く知っている。

あらゆる部活の助っ人で様々なスポーツの試合に参加し、下手な部員以上の活躍をすることは同学年の全員が知っている。

だが、この無謀な試合では流石に役に立たないだろうし、カレンにしてもそれは同じだろう。

俺達はこの娘と本気で刃を合わせられるのか…  
野球部全員がそう内心で自問自答していると…

「おい、早くかかってこい。腰でも抜けたのか？」

カレンの一言で全員に火が付いた。

陽子はともかく、こいつには目にも物を見せたい。  
野球部全員の心が結束し、試合が始まる。

## 第1話 これが私の生きる世界(5)

「ごめん！遅れた！」

そう言いながら、要がグラウンドの傍らに座る陽子の側に駆け寄って来た。

本日は部活も無く、授業にて体育がなかったため、体育服装を持って来ていなかった彼女は、何を着て行こうか散々迷った為に遅れたのだ。

結局、着てきたのはいつもの制服だった。

だが、手に金属バットを持つのは忘れていない。

「大地！敬遠なんかしたら、ぶっ殺すからね！」

やはり、要は有言実行の人だ、と陽子は感心する。

「はっはっは！必要ないぞ、要！」

それを聞いたカレンが、嘲笑うように大地に言う。

「こいつがどんなに小細工をしようが、所詮無駄と言つものだ。単なる時間の無駄に過ぎん」

そして、バットを頭上斜め45度に掲げる。

予告ホームランのサインだ。

「言つたな！！」

カレンの挑発に大地は一夕反応して悔しがる。それが面白くてカレンはついつい弄ってしまう。彼以外の多くの人間は気づいている。だが、彼は気づいてない。

「いくぞ！」

大地は振りかぶって一球投げようとする。球はもちろんストレートだ。

大地のストレートは最大で142kmをマークしたことがある。中学生ではかなりの速度であり、高校生に並んでも遜色の無いほどの実力である。

素人に打てるものではない。野球部員の誰もがそう思った。

大地の手から白球が放たれる。ボールは1秒も経たず、キャッチャーミットに収まるはず。

その時、カレンのエメラルドグリーンの瞳に獣の光が宿った。140kmもの速度を完全に見切り、カレンがバットをフルスイングする。

カッキイイイーン！

バットに真心を捉えられたボールはけたたましい音を上げ、仰角約30度で天へ打ち上げられる。

野球の打球とはとも思えない速度で飛ぶボールは空のあなたに消え、やがて完全に見えなくなる。

もちろん、グラウンドなどとつくに飛び越している。ボールの回収など誰にもできない。

「ふむ。少しやりすぎたか」

陽子を除いた全員が茫然自失に陥る中、カレンは暢気にそう呟く。そして、悠然と歩いてベースを回り、ホームへと帰ってくる。

「さすが、先輩！ナイスバッティング！！」

ホームで待っていた陽子が大喜びでカレンに近づき、ハイタッチを交し合う。

その後、ニヤリと笑いながら大地の方を見る。

「はっはっは！どうだ？実力の差が分かったか！？」

呵呵大笑しながら言うカレンに、大地を初めとする野球部員達は返す言葉も無い。

「ま、まぐれだろ…あんなの…」

大地はそう呟くのが精一杯だった。

そうでなくてはあんなことができるはずがない。

正直あれは人間業ではないからだ。

「どうした？もう戦意喪失か？」

野球部員達を見渡し、カレンがからかうように尋ねる。

「では、このまま羅漢飯店に行って、羅漢スペシャルに全員で挑戦するか？」

「あんたら、そんな賭けやってたの!？」

カレンの言葉を聞いた要が信じられないものを見る表情で、カレント大地を見比べる。

羅漢飯店は繁華街から少し外れた場所にある中華料理屋である。安い!美味い!多い!をモットーとしたメニューは学生達にも人気があり、野球部員達にとってもご用達の店の一つだ。

だが、羅漢スペシャルはやばい。

羅漢飯店の誇る大食いメニューのフルコースであるそれは、人間の胃袋の許容限界を度外視しているようにしか思えない量を誇る。

大食漢の多い野球部員達ですら見るのもおぞましいそのメニューを完食できる人間は、世界でも10人といないだろう、と要は思う。要も一度だけ見たことがある。

身長が2mを超えた、熊のような米兵と思しき人物が挑戦していたのだ。

その彼は、志半ばに「も、モンスター!」と呟いて倒れ、救急車に運ばれたのであった。

「あんたら…本物の馬鹿ね…」

大地の方を見ながら、要は呆れ果てた声で言う。

絶対に負けるつもりが無かったから軽く請け負ったのだろうが、少しはできることとできないことを考える、と言いたい。

カレンの性格上、中途半端で終わらせるはずなど無い。全員が倒れるまで完食を目指させることだろう。

「くっ…俺達は…負けられない…!」

大地は拳を握り締めてそう誓う。

あんな代物に挑戦させられた拳句、3000円弱の小遣いを失う

のは痛すぎる。

野球部員達は一度集まって、円陣を組み、気合を入れなおす。

「なんだか、青春って感じだね」

「…いや、違うでしょ」

その様子を見て、暢気に婆臭い事を言う陽子に、要が呆れた声でツッコミを入れる。

野球部が円陣を組んで気合を入れるのはいいが、相手と目的がア  
レ過ぎる。

## 第1話 これが私の生きる世界(6)

「さて、次は私の番だね」

陽子がそう言って立ち上がり、バットを拾い上げる。

そして、2、3度スイングして、よし！と言って、バッターボックスに歩いていく。

「陽子！かるく仕留めてやれ！」

カレンが陽子の後姿に気楽な調子で声援を送る。

だが、正直陽子には打てないだろう、と要は思う。

陽子はスポーツもソツなくこなす。

特に足は異様に速く、陸上部などに助っ人に行くこともあるほどだ。

だが、野球は単に走ればよいというものではない。

あらゆる意味で常識を逸脱したカレンは例外として、大地の球を素人の女子中生が打ち返せるはずがない。

この時、要はそう考えてた。

バッターボックスに入った陽子を見て、大地は落ち着きを取り戻す。

大地もまた陽子が優れた運動神経を持っていることを知っている。

バッティングの構えも、なかなか堂に入ったものだ。

だが、さすがに彼女にまで打たれることはないだろう。

「いつでもいいよ、西野君！」

バットを構え、笑顔で言う陽子の可愛らしさに、僅かに動揺しな

がら、

「あ、ああ！行くぞ！」

そう言い返して大地は振りかぶって投球姿勢に移る。  
そして、全力でストレートを放つ。

ズバン！

ボールは瞬く間にキャッチャーミットに吸い込まれる。  
陽子は棒立ちのままだった。  
ただ、呆けた様な顔で、瞬きを2度3度しただけだ。

当たり前の光景に、大地を初めとする野球部員は落ち着きと自信を取り戻す。

大地の球を素人が打てるわけではない、そのことをようやく再認識できた。

「凄い速いね、西野君！」

バッターボックスの陽子から聞こえた素直な賞賛の声に、大地は少し嬉しくなる。

気になる女子に賞賛されて嬉しくない男はいない。

だが、同時に少しだけ罪悪感を覚える。  
少しは加減をして、せめてバットに当てさせるくらいはした方がいいかもしれない、と大地は思う。

だが、そんな思考を読んだキャッチャーの大久保が首を横に振る。  
後に控えるカレンのことを考えると、確実にアウトを取らないといけないのだ。

(許せ、葉月…)

大地はそう心の中で呟きながら、投球姿勢に移る。  
そして、再び大地の手から渾身のストレートが放たれる。

スバン！

白球は再び、1秒弱でキャッチャーミットに収まる。  
陽子は変わらず棒立ちのままであった。

その様子を見て、要は軽くため息をついて言う。

「ま、こうなりますよね」

あまりに予想通りの結果。

第一、一人で全打席ホームランを打つつもりなら陽子を巻き込まないで欲しい。

そんな本音をさすがに声には出さず、要は横に座るカレンを非難がましい目で見ると。

当のカレンは暢気そのもので、どこからともなく取り出したポテトチップスの袋を開けたところだった。

「くつくつく、分からぬ奴よな」

心底愉快そうに含み笑いを漏らしながら、中身を一枚口にすする。  
そして、黙って袋の口を要の方に向ける。

「何がですか？」

要は遠慮なく一枚貰いながら短く尋ねる。

「陽子の奴、瞬きしてなかったろ？」

カレンの言葉に、要はポテチを齧りながら思い出す。

確かに、2球目の陽子は瞬きしていなかった。

だが、それが一体なんだというのか？

一方、バッターボックス側。

大久保は大地にボールを投げて返してから、陽子を見上げる。

彼も数多い陽子の知り合いであり、何でも屋の利用者である。

正直、学科の成績の悪い彼は陽子によく勉強を教えて貰っている。

陽子の教え方は、教師の説明よりよほど分かりやすく、授業では良く分からなかった数学の公式などもすぐに頭に入る。

テストで赤点を免れているのは、半分以上陽子のおかげだ。

「…なあ、葉月」

「何、大久保君？」

声をかけた大久保に、陽子が少し首を傾げて尋ねる。

「その…気にするなよ、西野の球なんて打てないのが普通だから」

「うん。西野君、凄いね」

まるで打てなくて気落ちしているのではないかと気遣う大久保に、陽子は笑顔で返事をする。

「でも、大丈夫だよ」

そう言って再び視線を前に戻した陽子を見て、大久保は胸を撫で下ろす。

どうも傷ついたり気落ちしたりはしていないようだ、と安心したのだ。

だが、数秒後彼は思い知る。

「大丈夫」の意味が、想像していたものとまるで違ったことを。

次で三振を取れる。

大地はそう思いながら、次のカレンとの勝負へと意識を移していた。

このまま陽子を三振に抑え続ければ、いかにカレンが人間離れしていようと1回で取れる点数は3点に抑えられる。

後は、カレンのピッチング次第。

最悪プライドを捨てて、全員でバントに走れば負けることはないだろう。

大地はそう思いながら振りかぶり、この打順最後の一球を投げる。

まるで放たれた矢のようなボール。

だが、陽子の目は次こそそれを捉えていた。

後はバットを当てるだけ。

陽子にとって、それは難しい作業ではない。

カキーン！

ダウンスイングで振られたバットにボールが当たり、打ち返される。

馬鹿な！？

グラウンドにいるカレンを除く全員がそう思った。

だが、打球はカレンのものとは比べ物にならないほど弱い。ショートゴロに終わったそれを、守備についていた部員がファーストに投げようとする。

だが、空のはずのファーストをみて、彼は驚愕する。僅か5秒も経たないうちに、既に陽子が辿り着いていたのだ。

「な？」

それが当たり前のことであるかようにカレンは言う。そして、ポテチを一掴み取り出し、豪快にそれを口にする。

「・・・あんなに動体視力良かったんですね、あの娘」

少しだけ気落ちしたように、要は言う。

いつものほほんとしている幼馴染に、そんな能力があったことを要は知らなかった。

なのに、カレンはそれを当然のように知っていた。

それがなぜか要にとってはショックであった。

同時に何故か湧き出してくるカレンに対する嫉妬と、そんなものを感じる自分が嫌になった。

「...さて、次は妾の打順だな」

そんな要の心を知らぬ氣にカレンは立ち上がり、バットを拾ってバッターボックスに向かう。

その後姿を見ながら、訳もなくイライラする要は、カレンの残して行ったポテチの袋を、腹いせとばかりに乱暴に掴む。

そして、袋に残っていたポテチを乱暴に掴み出し、口の中へ強引に押し込んだ。

## 第1話 これが私の生きる世界(7)

長い長い1回の表が終わった。

決闘部の獲得した得点は21点。

もはや、野球の点数と呼べないそれを獲得したカレンが、バットを振らず打席に立ち始めてようやく終わったのだ。

野球部員達は一様に唇を噛み締めながらグラウンドを去る。

カレンのありえなさもはやどうでもいいとして、陽子も確実にヒットを打ってくるのだからたまらない。

だが、彼らは希望を捨てたわけではない。

数がない決闘部は守備において圧倒的に不利だ。というより、まともに機能しない。

最悪、バントでもほぼ確実に塁は取れるのだ。

勝ち揺るがない。大地達はそう信じていた。まだこの時は。

一方で、陽子達も守備につく準備をしていた。

要がファーストにっこうか、と申し出たが、必要ない、とカレンに言われて却下された。

だが、本当に大丈夫なのだろうか？要の心はまだ不安であった。まだこの時は。

「陽子、このミットを使え」

カレンが陽子にキャッチャーミットを投げてよこす。

カーキ色のそれは、どう見ても皮製ではない。

さわってみると、何だかゴワゴワした麻布のようなものでできていることがわかった。

「部長、これなんです？」

流石に不思議に思った陽子がカレンに尋ねる。

「今日のために用意した特注のミットだ」

鷹揚に頷きながら、カレンは説明する。

「最新の対弾繊維で出来ていて、中には対衝撃パッドが入っている。距離や種類にもよるがライフル弾でも止められる代物だ」

「…一体どこでそんなもの仕入れてきたんですか？」

もはや何でもありだ。

感心を遙かに通り過ぎて、呆れと諦めの境地に達した要が脱力しきった声で尋ねる。

「ああ。アイラという年増に作らせたのだ。高くついたがな」

あの業突く張りめ、と悪態をついてカレンは言葉を締めくくる。

「さて、そろそろ行くか」

カレンはそう言って立ち上がり、軽く肩を回す。

「何か必殺の魔球とかあるんですか？」

要が何となく尋ねてみる。

野球部員達を全員三振に押さえようと言うのだから、何か必勝

の策でもあるのかと思ったのだ。

「いや、存外難しいのだよ、魔球って」

カレンが少しだけ悔しそうな顔で言う。

「この前試しに大リーグボール3号をやってみたのだが、無理だった。どうやってもボールが消えない」

「難しいんですねえ、魔球って」

しみじみと言うカレンに、しみじみと陽子が頷く。

一方で要は一層呆れ果てた顔になる。

これ以上呆れると、何かに目覚めてしまつかもしれない。

「まあ、妾のストレートはある意味魔球だから安心しろ」

カレンはニヤリと笑って言い、マウンドの方へ歩いていく。

「大丈夫だよ、要ちゃん」

「…そうね」

気楽に言う陽子に、要は生返事で返す。

もはや心配するのも無意味だと思いはじめたのだ。

「じゃあ、行ってくるね」

そう言って陽子もまたバッターボックスへと歩いて行く。

そして、マウンドに立ったカレンと、軽く投球練習をした。

「よし！もういいぞ！！」

2、3度ボールを投げた後、カレンが野球部員達に声をかける。

最初にバッターボックスに入って来たのは大地だった。

確か正式な打順は四番のはずだが、それは無視して来たらしい。

何が何でも打ってやる。

大地はそんな気迫を纏っていた。

「では、行くぞ？」

バッターボックスに入り、バットを構える大地に、カレンが軽く手を挙げて合図する。

その後、投球フォームに入り、ボールを投げる。

ズバァン！！

グラウンドにまるで銃声のような音が轟く。

見れば、陽子の持つカーキのミットにボールが飛び込んでいた。大地はあまりのことに戦慄する。

グラウンドの誰もカレンが投げたボールを認識出来なかったのだ。

「部長、手が痛いですよ」

少し涙目で陽子が抗議しながら、ボールを投げ返す。

「すまん！次はもう少し加減する！」

カレンがボールを受け取り、そう言って陽子に詫びる。  
見ればスピードガンを構えた大久保が凍りついていた。

その速度は302km。

新幹線をも上回る速度である。

そんな物に反応できるはずはないし、万一バットに当たっても  
へし折られるのが関の山だ。

(こいつには…勝てない…)

大地が膝から地に崩れ落ちる。

人知を超えた強大な敵に、対抗する術がない。

化け物の前に、人はあまりにも弱く小さい。

見れば、他の野球部員達も諦めの表情で天を仰いでいた。

戦いは終わったのである。

## 第1話 これが私の生きる世界(8)

「何をやっているんだ、お前達！」

突如、グラウンドに男子学生の声が響いた。

声とともに駆けてきたのは、カレンより少し背の高い男子学生だ。

逞しい身体付きだが、眼鏡をかけた知的な顔立ちは運動部にはあまり似つかわしくない。

彼は三年の佐々木。

現在の野球部のキャプテンである。

「よう、佐々木！」

辿り着いた佐々木に、カレンが軽く右手を挙げて挨拶する。

「やあ、水無月。これは一体何なんだ？」

佐々木は挨拶を返した後、グラウンドで地に伏せる大地を見て説明を求める。

「ふむ。実はな……」

カレンが今までの勝負の経緯をかい摘まんで話す。

「……そうか。迷惑をかけてすまなかった」

佐々木は素直にカレンに頭を下げる。

彼は決闘部の部室を正当な物であることを承知していた。

そして、時々暴走しようとする大地達に歯止めをかけていた。  
今回の件は受験勉強で忙しい彼の目を盗んで、独断で大地がや  
ったのだろう。

「いや、特に気にしてない。久し振りにいい運動をしたし、勝  
負には勝ったのだしな」

カレンとしては、別段不愉快に思う要素はない。  
大地をからかうのはなかなかいい娯楽ではあるし、久し振りに  
力を解放したので気分はいい。

「…その事なんだが…」

佐々木は頭を上げ、言いづらそうに続ける。

「野球部は近日試合がある。こいつらがいないと試合にならな  
い」

「…だから、罰ゲームは止める、と？」

その言葉に頷く佐々木を見て、カレンは不愉快そうに眉根を寄  
せる。

カレンは約束や契約をとても重視している。

事実、彼女は約束を破る事はないし、契約を交わせば確実にそ  
れを果たす。

故に相手が約束や契約を破る事は、許しがたい事だと考えてい  
るのだ。

佐々木の言い分も分かるし、どちらかと言えば好意的に考えて  
いる彼を困らせた訳ではない。

さりとして、契約をただで破られるのは面白くない。

どうしたものか、カレンがそう呟き思考を始める。

そこに、

「部長、こんなのですか？」

陽子が手を挙げて意見を言う。

「部長が部員のみみなを相手に、野球部の得意種目で戦ったんですよね？なら、今度は私と佐々木さんが決闘部の得意種目で戦ってくれたらいいんじゃないでしょうか？」

「ふむ……」

陽子の言葉に、カレンは顎に人差し指を当てて考える。

「…確かに、条件として公平と言えなくもないな」

数秒の思考の後、結論を出したカレンは、佐々木の方を見て言う。  
う。

「佐々木、デツキはあるか？」

「持ってきてるよ。水無月にいつ挑まれてもいいように、な」

カレンの言葉に、佐々木は苦笑して頷く。

「佐々木先輩もDMやってるんですか？」

佐々木の言葉を聞いた要は、何だか意外な気がした。

野球部のキャプテンであり、学年でもトップクラスの秀才としても名高い。

そんな文武両道の佐々木の趣味がカードゲームだとは思わなかった。

「ああ。これでも水無月のカードゲーム仲間だ」

要に微笑んでそう言った後、葉月を見て言う。

「じゃあ、葉月。その条件でお願いするよ」

「はい！」

陽子に了解を告げる佐々木を見て、カレンが言う。

「ならば、我が部室へ移動するぞ！ディスクがある方が盛り上がるしな！」

カレンの言葉に、陽子と佐々木は頷く。

そして、2人の決闘部員と要と10人野球部員達は、今回の件の発端となった因縁の部室へと歩いていった。

## 第1話 これが私の生きる世界(9)

白い四角のプレハブ小屋。

それが決闘部の部室であつた。

6畳ほどの部屋の中には、テーブルとベンチと本棚。

そして、PCやプロジェクター等の電子機器類が置かれてある。壁にはエアコン等も取り付けられており、小型の冷蔵庫も置かれている。

この設備は、確かに部室としては最上級のものと言えるだろう。

何故ゲリラ部がこんな部室を持って、あまつさえ電気の使用まで認められているのか。

その理由は誰も知らない。

「やってくるなりいきなり決闘だなんてえ、随分せっかちさんなんですわねえ」

PCを立ち上げ、プロジェクターの準備をしている少女がおりとりとした口調でいう。

長い烏の濡れ羽色の髪を、綺麗なプリンセスカットにしているこの少女は、決闘部の3人目の部員、白川雪乃である。

「役に立たんお前の知らんところであつた戦いの後始末だ」

「あらあらあ。ならあ、お茶でも持って見物に行けばよかったですわねえ」

辛辣なレヴィの言葉を、雪乃は軽く受け流す。

そして、PCを操作すると、スクリーンの上下半分に、佐々木と陽子のフィールドの様子が映し出された。

「さて、設定完了ですう。思う存分やっちゃってくださいあい」

そう言って雪乃はパイプ椅子に座わる。

「ありがとうございます、白川先輩！」

スクリーンの脇に立つ陽子は、準備をしてくれた雪乃に笑顔で礼を言う。

「ふふふ…お礼なんていいんですよお？陽子ちゃんのためですものお」

陽子の笑顔を見ながら、雪乃はおっとりとした口調で言う。

だが、その表情は男を惑わす魔女のような笑顔だ。

それを向けられた訳でもない、佐々木達野球部員達ですら、その妖艶さに一瞬ドキリとする。

「本当に礼を言うほどの事じゃないしな」

「じゃあ、カレンさんがやってくださいい」

だが、カレンに水を差された瞬間その笑顔は消え、代わりに唇を尖らせた子供っぽい表情に取って代わられる。

相変わらずな先輩達二人を笑顔で見つめる。

その後、陽子はスクリーンを挟んで対面に立つ佐々木を見て言う。

「では、先輩。よろしく願いします」

そう言って、陽子は頭を下げる。

それはまるで、剣道の試合の前にする礼のようであった。

「ああ。こちらこそよろしく」

佐々木もまた、そう言って会釈を返した。

そして、二人はサングラスのようなディスプレイを付ける。

これは二人がそれぞれ左手に装着している、DM専用の次世代ゲーム機、デュエルディスクのパーツだ。

これを着ける事により、ディスクは原作やアニメのような迫力のある決闘を再現できるのである。

もちろん、他の者にその決闘の様子は見えない。

だが、二人の横にあるスクリーンにディスクのエフェクトを投影することで、ある程度同じような臨場感を再現できる。

つまり、決闘部の部室では部屋にいるもの全員が、エフェクトのある決闘を観戦できるのである。

「…すいません、部長」

大地がディスクを構える佐々木に頭を下げる。

この決闘に負ければ、佐々木まで羅漢スペシャルを食わされる事だろう。

相手の戦力を甘くみて、今佐々木まで巻き込んだ事を、大地は心から悔やんでいた。

「全くだ。困った奴らだよ、お前らは」

そんな大地に、苦笑しながら佐々木は言う。

その口調は穏やかで、彼等を責め立てるものではなかった。

「決闘が終わったなら、特訓だぞ？いいな？」

「…はい！」

厳しくも優しい部長の言葉に、野球部員達は元気良く返事をする。

今回の事は決して褒められた事ではない。

むしろ、責められて当然だ。

だが、きつと彼等は何か得る物があつたはずだ。

それなら、例えここで負けて羅漢スペシャルと一緒に食べる羽目になっても後悔はない。

佐々木はそう考えていた。

「あのおく…野郎共の暑苦しい青春ドラマとかいららないんでえ、さっさと始めてくれませんかぁ？」

そんな中、白けきつた口調で雪乃が水を差す。

雪乃が見たいのは、可愛い陽子が織り成す可愛い決闘である。

野郎どものむさ苦しいやり取りなどには、一片の値打ちも感じない。

そんな雪乃の様子を見て、要はため息を一つつき、思う。

何故、陽子の周りにはこんなろくでもない連中ばかり集まるの  
だろう、と。

「すまないな、白川」

佐々木が雪乃に苦笑しながら詫びを入れる。

そして、ディスクのタッチパネル式のディスプレイを操作する。

「じゃあ、始めよう」

「はい！」

佐々木の言葉に応え、陽子もディスクを操作する。

そして、二つのディスクが決闘モードに移行し、赤外線の色が  
絡まり合う。

その瞬間、二人の決闘の幕が開いた。

…決闘！

## 第1話 - 決闘 陽子VS佐々木

決闘開始。

先攻は陽子。

第1ターン

「私のターン！ドロー！」

陽子がそう言って、ディスクのデッキホルダーから僅かに頭を出したカードを引く。

その掛け声を聞いて、要は頭を抱えなくなる。

(あの娘…まだあれ言ってるんだ…)

俺(を初めとする一人称)のターン！ドロー！、の台詞は原作漫画やアニメではポピュラーな台詞である。

だが、現実世界でそんな事を言いながらドローをする者は、ほとんどいない。

にも関わらず陽子が言うのは、カレンのせいであるらしい。

『古式床しい決闘者はこう宣言しながらドローしなくてはならない』

とかなんとか吹き込まれたそうだ。

後、そう言いながらドローすると、引きが良くなるとも言って

いたような気がする。

そんな迷信に気がつかないほど馬鹿でもあるまいし、いい加減それはやめて欲しい、と要は思う。

そんな要の視線にかまわず、陽子はドローしたカードを確認し、最初の一手のリアクションを開始する。

- メインフェイズ1 -

「モンスターをセット！カードをセット！ターンエンド！」

陽子の目の前に巨大なカードが2枚現れ、ターンエンドが宣言される。

「…ねえ、陽子モンスター出して攻めたりしないんですか？」

スクリーンを見て要が隣の雪乃に質問する。

陽子がDMをプレイしていることもあり、要は一応原作に目を通している。

原作では確か、1ターン目からモンスターを積極的に出していたような印象を受ける。

「DMでは1ターン目には攻撃できないんですよ」

そんな要に雪乃は苦笑しながら説明する。

「後お、陽子ちゃんのスタイルは攻撃を受けてえ、その後で反撃していく、いわゆる後の先を取っていく戦術なのですう。だから、あれでいいんですよ」

「へえ……」

雪野の言葉に思わず要は陽子の方を見る。

普段のほほんとしている幼馴染が何やら高度な戦術を用いて闘っているというのが、なんだか意外な気がしたのだ。

- ターンエンド -

佐々木 (LP: 8000 / 手札 5枚)

(なし)

(なし)

陽子 (LP: 8000 / 手札 4枚)

## 第2ターン

「僕のターンだね。ドロー」

「部長！がんばってください！」

野球部員たちの声援を受けながら、佐々木はデッキからカードをドローする。

- メインフェイズ 1 -

「手札から、サイバードラゴンを特殊召喚する」

佐々木がカードをディスクに挿すと、スクリーンに金属のボディを持つ長大な龍が現れる。

「死霊騎士デスカリバーを召喚」

佐々木の宣言と共に、彼のフィールドに黒い鎧を身に纏い、黒馬に跨がる騎士が現れる。

バトルフェイズ

「サイバードラゴンでリバースモンスターを攻撃」

佐々木がディスクを操作する。

すると、スクリーンの中のサイバードラゴンの口が開き、そこから白い光線が放たれようとする。

だが…

「リバースカードオープン！速攻魔法『エネミーコントローラー』を発動！サイバードラゴンの表示形式を変更します！」

陽子のフィールドのカードが反転し、フィールドに巨大なコントローラーが現れる。

そして、コントローラーからコードが伸びサイバードラゴンの身体に突き刺さる。

一時的に身体のコントロールを奪われたサイバードラゴンは、とぐるを巻くような防御態勢をとり、攻撃は中断された。

「デスカリバーナイトでリバースモンスターを攻撃」

黒衣の騎士が馬に鞭を入れ、陽子のフィールドに突進を仕掛ける。

次の瞬間、陽子のフィールドのカードが反転し、モンスターが姿を現す。

現れたのは、背中に小さな翼を持つカエルのようなモンスター、黄泉ガエルであった。

デスカリバーナイトは黄泉ガエルを切り払い、そのままフィールドを駆け巡り、佐々木の下に舞い戻る。

「黄泉ガエルか…」

デスカリバーナイトの剣に切り裂かれ、虚空に消える黄泉ガエルを見て、佐々木が少し渋い表情になる。

メインフェイズ2

「カードを一枚セット。ターンエンド」

佐々木の前に伏せカードが現れ、ターンエンドが宣言される。

ターンエンド

佐々木（LP：8000/手札3枚）

（なし）

（なし）

陽子（LP8000/手札4枚）

### 第3ターン

「私のターン！ドロー！」

陽子は掛け声と共にドローする。

スタンバイフェイズ

「黄泉ガエルの効果を発動！」

フィールドに柔らかな光の柱が降りてくる。

そして、その柱の中、天から黄泉ガエルがゆっくりと降りて来た。

「デスカリバーナイトの効果発動」

佐々木のフィールドのデスカリバーナイトが黒い霧の塊に姿を変える。

霧は降りて来たばかりの黄泉ガエルを飲み込み、共に虚空へと消えた。

だが…

「黄泉ガエルの効果発動！」

再びフィールドに光の柱が降りて来て、その中から黄泉ガエルが姿を現した。

「…あれって無駄死にじゃないんですか？」

そんなフィールドの様子を見ていた要が、小声で雪乃に尋ねる。どうしてそんな無駄なプレイングをしたのか、要には分からなかったのだ。

「ですねぇ」

それに対して、雪乃は苦笑混じりに答える。

「デスカリバーナイトはあ、モンスター効果の発動に、強制的に発動してしまうんですよ。だから、スタンバイフェイズでえ、何度でも効果を使える黄泉ガエルがいると無駄死にしちゃうんです」

「へえ……」

雪乃の説明を聞き、要は納得する。

モンスターを破壊したはずの佐々木が渋い顔をしていた理由がこれで分かった。

メインフェイズ1

「手札から、速攻魔法『サイクロン』を発動！」

陽子がカードをプレイすると、スクリーン上のフィールドに竜巻が起こる。

竜巻は佐々木のフィールドを襲い、伏せカードを巻き込み破壊した。

「黄泉ガエルをリリースし、邪帝ガイウスをアドバンス召喚！」

フィールドの黄泉ガエルが虚空に消える。

そして、入れ代わりに現れたのは、黒い鎧とマントを身に纏う巨人が姿を現す。

彼の名はガイウス。

古の無慈悲なる暴君の名を持つ闇の帝王だ。

「ガイウスの効果発動！」

ガイウスがその手に持つ黒い球体、巨大な重力球をサイバードラゴンに投げつける。

サイバードラゴンは重力球に潰され、そこに出来たマイクロブラックホールの中に消えた。

「一気に勝負を決めますよ」

そう言つて陽子は一枚のカードを手取る。

それは母が最後に買つてくれたあのカードのトリガー。

「手札から、通常魔法『ダークコーリング』を発動！手札のゴーズとグランマーグを除外し、エキストラデッキからE HERO ダークガイアを融合召喚！」

スクリーンの中の世界が突如として地震に襲われる。

揺れは次第に激しくなり、やがて地面が割れマグマが吹き出す。

そして、マグマと共に巨大な悪魔が姿を現す。

金剛石の鎧を身に纏う、翼竜のような被膜の翼を持つ巨人。

それが怒れる大地の化身、ダークガイアの姿だ。

「なんか、凄いのができましたね！」

凄まじい登場エフェクトを見た要が、少し興奮気味に言う。  
攻撃力も5100。

原作最強と言われた青眼の白龍をも遙かに上回る力だ。

「うーん…凄いの凄いのですけどお…」

雪乃は少し困ったように言う。

「…まあ、予想通り、と言うところか」

スクリーンを見ながら、カレンは微かなため息と共に言う。

「…陽子ちゃんは優しい子ですからねえ」

同じくため息と共に雪乃は言う。

「え…？」

そんな二人の反応を見て、要は首を傾げる。

自分としては一気に攻めようとする陽子は、普段では考えられないぐらい強引で容赦がないと感じたからだ。

バトルフェイズ

「邪帝ガイウスでダイレクトアタック！」

スクリーンの中のガイウスが佐々木に接近し、漆黒の拳を叩き付ける。

もちろんただの映像であり、佐々木に被害などあるわけではない。実際佐々木は平然と立ってそれを受け止めている。だが、なかなかの迫力だ、と要は思う。

自分が佐々木の立場なら、思わず悲鳴の一つぐらいあげてしまっ  
うかもしれない。

「ダークガイアでダイレクトアタック！」

ダークガイアがその右の掌に灼熱のマグマを纏わせる。

そして、佐々木目掛けて突撃し、爆熱の抜き手を叩きこんだ。

「冥府の使者ゴーズの効果発動！」

佐々木の宣言と共に、フィールドに巨大な螺旋階段が現れる。

地の底から続くと思われるそれを登って来る二人の人影がある。黒づくめの衣装の男と、白と赤の衣装の女。

彼らは冥府の使者ゴーズとカイエン。

強大な力を持つ冥界の使いだ。

「ちょっと！なんなんですか、アレ！」

現れたモンスターを見て、要が身を乗り出して言う。

並んだモンスターの攻撃力は2700と5100。

手札4枚を消費して出した陽子のモンスター達より強い。

それがたった一枚の札で出てきたのだ。

「やっぱりありましたかあ」

苦笑しながら雪乃は言う。

その様子はあらかじめこうなることが分かっていたようだ。

「相手の手札が十分な時にダイレクトアタックをする時は、ゴーズを警戒するものだ」

ため息をつきながら、カレンは言う。

その様子はちょっと呆れているようにも見える。

「…要はドジを踏んだんですね、あの娘」

カレンにつられるように、要もため息混じりに言う。

やはり陽子はどこか抜けているようだ。DMの世界でもそれは変わらないようだ。

「あらら。ちょっとマズったかも」

当の陽子は全然慌てた様子もなく、フィールドを見て言う。

手札はもうなく、状況を挽回できるとは思えない。

だが、陽子の様子は落ち着いていた。

何を考えているのだろう、要は幼なじみの様子を見て怪訝に思う。

そんな要の気持ちを意にも介さず、陽子はターンエンドを宣言した。

佐々木（LP：800 / 手札2枚）

（なし）

(なし)

陽子 (LP8000 / 手札0枚)

第4ターン

「行くよ。ドロー」

佐々木はカードをドローし、フィールドの様子を見る。

「悪いけど、俺の勝ちみたいだな」

そして、そう宣言する。

メインフェイズ1

「手札から、通常魔法『ライティングボルテックス』を発動」

佐々木がカードをプレイすると、フィールドを雷の嵐が襲い、陽子のフィールドのガイウスとダークガイアを打ちのめす。

「疾風のゲイルを召喚」

佐々木がカードを挿すと、スクリーンにカラスをデルフォメシ  
たような鳥型モンスターが現れた。

「あゝあゝ」

決闘の経緯を見て、要は天井を仰ぐ。

相手のフィールドのモンスターの総攻撃力は8000を超える。  
それを防ぐ手段は陽子にはない。

明らかに陽子の負けだった。

「…負けちゃいましたね」

サバサバとした様子で陽子は言う。

「そうだな」

そんな陽子に、佐々木は少しだけ申し訳なさそうに言う。

「すまないな、葉月。今度はまともに決闘しよう」

「はい。お願いします」

そんな佐々木に陽子は笑顔で言う。

そして、両者はディスクの電源を落とし、決闘は終わった。

野球部員達の歓声が狭い部室にこだまする。

その大音声は、苦笑と共に漏らされた、カレンと雪乃のため息を掻き消した。

…決闘終了。

## 第1話 これが私の生きる世界（10）

「…えーと、本当に食べるんですか？」

大量の人で賑わう、どこか油っぽい中華料理店。

料理の匂いと、人の喧騒の中、陽子はテーブルに座っていた。

その目の前には、有り得ない程の大きさのドンブリがある。

そこには10玉以上は使われているだろう麺と、2リットル以上はあるスープ。そして、それを覆い尽くす大量の具がはいつていた。

「当たり前であろう。負けたんだし」

「大丈夫ですよ。陽子ちゃんは食べても太らない体質のようですし」

「ま、頑張つてね」

対面と両隣に座る幼なじみと先輩達は、口々に言い無情にも陽子を見放す。

戦いは終わり、野球部員達は無事解散となった。

結局、野球部と決闘部の勝負は痛み分け、という結末に終わった。最も真の勝敗は誰の目にも明らかである。

次の身の程知らずが現れるまで、決闘部の部室は安泰であろう。

だが、負けた陽子は罰として羅漢飯店に連行されていた。

そして、今カレンに羅漢スペシャルの一部である、羅漢満漢ラーメンを完食することを強要されているのである。

いくら羅漢スペシャル全メニューではないとはいえ、常識的には有り得ない量だ。

そんな強敵を前にして、陽子は助けを求めようと周囲を見渡す。だが、決闘部の鉄の掟（「カレンの我が儘や思いつき」は非情であった）。

「…でも、わざとだったのね、あれ」

要が自身の頼んだ麻婆豆腐をつつきながら言う。

「陽子ちゃんらしいですう。バレバレだったのはいただけませんけどお」

雪乃はそう言って杏仁豆腐を頬張った。

あの時、ゴーズが手札にあった事を陽子は予感していた。

それを敢えて負ける為に利用したのだ。

無ければどうしようか、と思っていたが、ヤマカンは的中し、陽子の思惑通り事は運んだ。

「だって…あそこで勝ったら佐々木先輩可哀相だし」

そう言っって一口麺を啜り、陽子は無言で中華丼を食らいつつけるカレンに眼を向ける。

「カレン先輩と佐々木先輩の仲が悪くなっても嫌だしね」

「抜かせ」

カレンは食べる手を止め、鼻で笑って言う。

「だが、お陰で面倒臭い事にはならなかった。そこは感謝しよう」

「どういたしまして」

礼を言うカレンに、陽子は笑顔で返す。

「でも、少し意外だったかな」

再びラーメンに取り掛かった陽子の横顔を見ながら、要は呟くように言う。

「陽子がカレン先輩に意見して、自分から事態を収集するなんて」

「そう?」

要の言葉に陽子は顔を上げて、不思議そうに言う。

要のイメージでは、陽子はいつもカレンに振り回されてばかりだと思っていた。

決闘部に入ったのも半ば無理矢理だったし、今まで巻き込まれていた事件も大抵自身が主導でやっていたようには見えなかった。

正直、周囲に流される事が多く、能動的に動いたりはしないと  
思っていたのだ。

「ん〜、なんて言うのかな?」

陽子はラーメンのスープを掻き混ぜながら言葉を探す。

「カレン先輩って、凄い人なんだけど、なんだか変な所で不器用だから、そう言うところはフォローしないと、って思うんだ」

「つまりい、陽子ちゃんはある、カレンさんの女房役ってところですねえ」

陽子の言葉に、雪乃が嬉しそうに横槍を入れる。

「…まあ、否定はせんが、な」

その言葉を聞いたカレンは、少し気恥ずかしそうに顔を逸らして言う。

「カレンさんだけじゃないですよ。私も、それに要ちゃんも陽子ちゃんに色々助けられていますからあ」

「私は！別に…」

そう言いながら席を立ちかけた要は、雪乃の目に制されて言葉を詰まらせ、席に着く。

(本当にそうですか?)

と尋ねられた気がしたのだ。

「陽子ちゃんはある、これからもみんなの奥さんでいてください  
ねえ」

「ああ。いざと言う時は頼りにしてるよ」

「はい…」

先輩達の言葉に陽子は元気に返事をする。

そんな陽子の顔を見て、要は軽い自己嫌悪を味わっていた。自分は何故あんな事を言おうとしたのだろうか？

答えは既にでていた。

自分は常に陽子の保護者でいたいのだ、と。

まだ4年前の気分が抜けてないのだ、と。

そんな要を見て、陽子は屈託のない笑みを浮かべて言う。

「じゃあ、私の奥さんは要ちゃんだね。いっぱい助けて貰ってるし」

陽子の言葉を聞いて、要は軽く笑う。

確かに、自分はこんな陽子に救われているのだろう。

「…ま、あんた危なっかしいし」

「うん。これからも一緒にいてね」

陽子と笑顔で言葉を交わし、要は表情を和らげた。

「でね、早速助けて欲しいんだけど…」

陽子は手元の、まだ半分にもならないラーメンと要を見比べて言う。

「それとこれとは話が別」

陽子のお願いを、要はバツサリとぶった切る。

「さあ、食べ食べ。伸びたり冷めたりすると本格的にどうにもならんぞ？」

カレンが手が止まっている陽子の尻を叩き、

「ふれ〜ふれ〜、よ・お・こ・ちゃん」

雪乃が気の抜けたエールを送り、

「ふえ〜ん」

陽子が情けない泣き声をあげた。

そんな他愛のない日常と、仲間達の輪の中。  
それが陽子の生きる世界だった。

なお、この10数分後、陽子は驚異の粘りを見せ完食を果たした。

だが、明るる日の昼まで胃がもたれてるくに食事ができなかったという。

## 第2話・世界は思うほど広くなくて(1)

暖かな日差しの中、男は目を覚ます。

ここは日本アルプスの山中。

眼下に広がるのは、黒っぽい岩肌と緑の木々。

ここが男の住む家だ。

傍らにおいてある水筒を空け、中身をキャップに注ぐ。

黒っぽい液体は、昨日作っておいたコーヒー。

まだ暖かいそれを口にする。

口に広がるのは独特の苦味、そして、微かな甘味と酸味。

「ん、美味しい」

男は何度も味わったコーヒーの味に今日もまた感動して言う。

「珈琲。それは悪魔のように黒く、地獄のように熱く…後なんだったか？」

コーヒーに関する有名な文句を呟こうとして、途中から思い出せず男は口ごもる。

「天使のように純で、まるで恋のように甘い、ですよ」

そんな男の背後から声がかかる。

男は振り向き、声の主の姿を確認する。

立っていたのはセミロングの髪の小柄な少女。

ピンクに近い赤のパーカーと、ベージュのハーフパンツに黒いタイツと言う姿の彼女は山ガールのそれであった。

「よう、陽子ちゃん。久しぶりだね」

微笑む少女・葉月陽子に、男は左手を上げて挨拶する。

「お久しぶりです。伯父さん」

そう言って陽子もまた挨拶を返す。

時は5月3日。

学生にとっては待ちに待ったゴールデンウィークの真っ只中であつた。

## 第2話・世界は思うほど広くなくて(2)

「山で暮らすう!?!?」

昼休みの教室内に親友永石要の声が響き渡る。

「うん。そうだよ?」

昼食のやきそばパンを食べながら、陽子は平然と言う。

その様子は、何故要が驚いているかわからない、と言った風体だった。

「お父さん、仕事で当分帰らないらしいから、家にいても一人ぼっちだし」

少し寂しそうに微笑みながら陽子は言う。

陽子の父、葉月耕四郎は探偵だか弁護士だかわからない仕事をしている。

故に調査で家を空けることがしばしばあるらしい。

母は4年前に事故で亡くなっており、父がいなければ陽子は家で一人ぼっちになるのは自明の理だ。

「要ちゃんもモデルの仕事で忙しいんでしょ?」

「うん、そうだけど、さ」

陽子の言葉に僅かに視線をそらして、要は言う。

モデルの仕事のある要はゴールデンウィークも暇ではない。

それがなければ陽子を家に泊めて、ずっと一緒にいるのだが。

「でもさ、山とが行かないでカレン先輩が白川先輩の家にも行けばいいんじゃないの？」

要は決闘部の2人の先輩を思い浮かべて言う。

2人とも陽子とは極めて親密である。家に泊まるくらい問題はな  
いはずだ。

「カレン先輩忙しいみたい。彼氏さんどこか出かけるみたいだ  
から」

「へえ、そうなの…って彼氏い!?!」

陽子の言葉を聞き、要は思わず席から腰を浮かしかける。

「あの物体に彼氏なんてありえないでしょ!?!」

「…物体は酷いよ、要ちゃん」

非常に失礼なことを言う要に、陽子は苦笑しながらやんわりと嗜  
める。

「カレン先輩美人だし、彼氏さんいても不思議じゃないと思うけ  
ど?」

「まあ、そりゃそうだけど…」

陽子の言葉に、要は件の先輩を思い出す。

この世のものとは思えないほどの美貌と、中学生とはとても思え  
ないプロポーションを持つカレンは、間違いなく学校一の美女だ。

だが、かなりの変わり者である彼女に近づく男は5月を境に少なくなり、7月には完全にいなくなる。

また、彼女本人も恋愛事にはいまいち興味がなさそうであり、告白してくる男子を悉く蹴散らしてる。

そんな彼女に彼氏がいるなどは、要にはとても信じがたいことだった。

「で、雪之先輩はちょっと旅行に行くんだって。ヒンノムの谷とかなんとか言ってたけど」

「何？その得体の知れない旅行先は…」

陽子の言葉に、要は呆れた様に言う。

名前から察するに欧州のようだが、要はその地名を全く聞いたことがない。少なくとも一般的な観光地ではなさそうだ。

そんなところに何をしにいくのか分からないが、カレンより更に得体の知れない雪之の考えることなど自分に分かるはずもない、と早々に思考を切り上げた。

「まあ、大丈夫だよ。迅伯父さんいるし」

陽子は笑顔でそう言い、ビン牛乳を両手で持って飲み始める。

母の兄である坂崎<sup>サカザキ</sup>迅は、世界でも有名なプロの登山家である。

彼は家を持たず、日本アルプス山中で生活をしている。

山岳救助と執筆した本の印税で生計を立てているらしく、買い物をするとき以外は人里に下りることはほとんどない。

陽子とは仲が良く、父がいない連休などはよく世話になっている。おかげで彼がどの辺りでテントを張っているかは大体わかる。

「まあ生活面では心配ないんだろうけど…」

要は眉根を寄せて言う。  
会った事はないが、陽子がこれだけ慕うことを考えると迅の人格に問題はなさそうだ。  
だが、うら若い女の子が何日も野外生活をするのはどうか、と要は考えていた。

「大体お風呂とかどうすんのよ？」

「平気平気。温泉あるし」

要の心配を、陽子は軽く笑ってあしらう。

伯父のところ泊まりに行くのは初めてではない。そのため日本アルプスに関してはそれなりに詳しいのだ。

「伯父さんの秘密の温泉があるんだけどね。そこがいい所なの。時々お猿さんとかも入ってるんだよ」

笑顔で言う陽子の様子に、要は少し引っかかるものがあつた。

「…伯父さんの秘密の温泉って、店とかじゃないわよね？」

「うん。普通に池みたいなのがあるだけ。だから、お金とか要らないんだよ」

暢気に言う陽子に、要は軽く頭痛を覚えながら更に問う。

「……混浴よね？」

「うん。いつも伯父さんが入ってるよ」

やっぱり。

もぐもぐとパンを齧りながら言う陽子の前で、要は脱力し大きく肩を落とす。

「…あんだ、それ恥ずかしくないわけ？」

「え？なんで？」

要の問いに、陽子は軽く首を傾げて問い返す。

「伯父さんには小さいときにおしめとかも変えてもらったことあるらしいし、恥ずかしがることなんてないと思うけど？」

「…ああ、はいはい」

平然と言う陽子に、要は軽く頭痛を覚え額を右手で押さえながら言う。

陽子の言っていることは別に間違いではないのだが、要としては少し信じ難い価値観だ。

要自身は小学4年の頃には肉親と風呂に入るなど考えられなくなっていたのだから。

自分が入浴中の浴室に父や兄が入ってきたら迷わず洗面器を投げつけることだろう。

「あんだって、幸せよね」

ある意味でね、と心の中で付け加え、要は言う。

「うん。幸せだよ」

本当に幸せそうな笑顔で言う親友の姿を見て、要は今日もまた盛大なため息をついたのであった。

## 第2話・世界は思うほど広くなくて(3)

「どうでした？ネパールは」

春先の山を歩きながら陽子は言う。

今陽子達がいるのは、まだ雪の残る中腹部である。  
完全に雪が溶けるのは当分先になるだろう。

「貴重な体験だったよ。久々に本気で登った感じだった」

陽子の一步先を歩きながら、迅は言う。

その言葉を聞き、陽子は軽く笑う。

やはり、この伯父は根っからのクライマーで山男だ。

「また私も連れてってくださいよ、ヨセミテとか」

「いいね。今度の原稿料出たら、夏休みにでも行こうか？」

第2話・世界は思うほど広くなくて(3)(後書き)

まだ途中です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7685u/>

---

遊戯王交響詩篇 - DUEL ALIVE -

2011年10月14日23時02分発行